

令和7年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 ひびきの 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

教科に関する調査（国語、算数、理科）
① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問調査

児童質問調査
○ 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

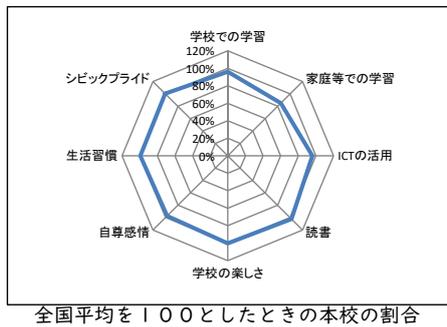
(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	平均正答率は県平均と同等の問題もあったが、全国平均をやや下回った。「書くこと」の領域では、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する内容の正答率が高かった。「読むこと」の領域では、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける問題に課題が見られた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	話し合いの記録の書き表し方を説明したのとして適切なものを選択することができるかどうかを問う問題。	
	努力が必要な問題	事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかを問う問題。	

算数	全体的な傾向や特徴など	「データの活用」では、適切なグラフを選択し、その理由を言葉や数を用いて記述で解答する問題の正答率が高かった。「図形」の領域では、角の大きさについて理解しているかまた、コンパスを使い平行四辺形を作図することができるかどうか問われる問題に課題が見られた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかを問う問題。	
	努力が必要な問題	はかりの目盛りを読むことができるかどうかを問う問題。 数直線上に示された数を分数で書く。	

理科	全体的な傾向や特徴など	正答率は全国平均をやや下回った。「エネルギー」を柱とする領域では、電気の回路のつくり方や乾電池のつなぎ方に関する知識が身に付いているかを問う問題の正答率が高かった。一方「地球」を柱とする領域では、結果を基に結論を導いた理由を表現する問題に課題が見られた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	赤玉土の粒による水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験方法を発想し、表現できるかどうかを問う問題。	
	努力が必要な問題	身の回りの金属について、電気を通すもの、磁石に引き付けられるものがあること知識が身に付いているかどうかを問う問題。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



質問調査の結果分析

「学校の楽しさ」に関する項目について、全国平均と同程度の児童が肯定的に回答しており、良好な人間関係が形成されていることがうかがえる。一方で、「学校に行くのは楽しいと思うか」や「自尊感情」に関する項目については、全国平均と同等程度の高い数値で推移している。「シビックプライド」に関する項目は2年連続で上昇傾向にあり、全国平均を上回っていることから、地域や社会とのつながりを意識した教育の成果が表れていると捉えられる。

一方、家庭等での学習に関する項目では、全国平均をやや下回ったが、ICTを家庭での学習に活用している児童は多いことから、日常的なICT活用が学習の一部として定着しつつあると考えられる。今後、ICTの活用ならびにドリルアプリ等の積極的な活用を図る必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

国語科においては、文章中の事実と感想・意見との関係を捉え、要旨を把握する力を高めるため、読みの視点を明確にした指導を行う。叙述を根拠に考えさせる問いかけを重視し、事実と意見を整理・対比する活動を通して、文章全体の構成を意識した読みを定着させる。

算数科においては、はかりの目盛りを正確に読む力を高めるため、基準となる1目盛りの大きさに着目させ、数え方を言語化する指導を繰り返し行う。また、数直線上の数を分数で表す活動を通して、等分の意味と分数の大きさを視覚的に捉える経験を積ませる。

理科においては、実験結果と知識が結び付かず、用語を暗記的に理解している。実験結果を表や分類図に整理させ、結果から分かったことを言語化する活動を取り入れ、知識と経験を関連付けて定着を図る。

② 家庭生活習慣等に関する取組

休日の家庭学習は比較的十分に行っている児童が見られる一方で、平日の家庭学習時間はやや少ない傾向にある。また、ICTを家庭学習に活用している児童は多い。児童が積極的に学習に取り組めるようドリルアプリ等を積極的に取り入れていく。